

目次

- ◇センター長挨拶
- ◇IWATE UNIVERSITY GIVING CAMPAIGN 2023の御礼
- ◇上田小学校・仁王小学校学習支援ボランティアの登録募集開始！
- ◇特別講演会のお知らせ
- ◇「教員研修会」に参加しませんか！
- ◇連載 あの日を忘れない(5)「私たちは「地域」をどう理解すればよいのか？」

岩手大学教育学部附属 教育実践・学校安全学研究開発センター長

清水 茂幸



岩手大学教育学部附属教育実践・学校安全学研究開発センターは、2020年に教育実践総合センターから改組されて誕生しました。このセンターの新設の背後には、2011年の東日本大震災を契機として、県内の沿岸地域を含む地域で進められてきた防災教育の成果と研究成果が影響しています。一方学校では、自然災害だけではなく、学習中の事故や暴力、いじめ、通学途中の交通事故や誘拐など、さまざまなリスクが存在しています。これらのリスクを防ぎ、安全な学校環境を提供するための手法や課題を総合的に検討し、学校現場に対して実用的な提案を行うことが、このセンターの改組の主要な理由です。

2023年の主な活動としては、ハイブリッド方式の学校安全学シンポジウムが開催されました。このイベントでは、「ASUKAモデルの教訓と小学校段階からの救命教育」をテーマに掲げ、学校事故対応の在り方や救命教育の重要性について議論が行われました。多くの学校安全に関わる団体や教育関係者が参加し、安全教育の充実を目指す議論が交わされました。非常に有意義なシンポジウムだったと考えます。

さて、今年度の主な活動は下記の通りとなります。

①学習支援ボランティア募集:上田小学校・仁王小学校にて、学習支援ボランティアを募集します。

この活動は、算数科の個別指導、家庭科の実技支援、校外学習の安全見守り、図書館環境整備などを含みます。教職に興味のある岩手大学の教育学部生や教員免許取得予定の他学部生が対象です。

②教員研修会:「岩手の教員に期待すること」をテーマに、岩手県教育委員会事務局の佐藤孝之先生が講演します。教職を目指す学生や院生、現職教員の皆さまにとって、大変参考になるお話になりますので、ぜひご参加ください。日時は6月15日を予定しています。

③特別講演会:「命を守るために～ASUKAモデルへの想い～」をテーマに特別講演が予定されています。この講演会は、桐田明日香さんの母親である桐田寿子さんを招き、教職員や学生に向けて救命知識やスキルの必要性を訴えるキックオフイベントとして位置づけられています。救命講習会を定期的に行う計画もあり、教職員や学生にとって、実践的な学びの場となることが期待されています。日時は6月1日(土)を予定しています。

このように、本センターは今年度も学校現場の安全確保という重要な使命を担い、教育方法の革新と児童・生徒の安全を守るための研究開発を行っていきたいと思います。研究の成果を岩手県内はもとより、全国に発信していく予定ですので、学校関係者をはじめ、地域の皆様のご理解とご支援ご協力を賜れば幸いに存じます。

IWATE UNIVERSITY GIVING CAMPAIGN 2023の御礼

2023年6月19日から6月25日にかけて開催されたオンラインチャリティーイベントに本センターが参加しました。今回のキャンペーン期間中に80名から投票による応援をいただきました。応援いただいた皆様に改めて御礼申し上げます。東日本大震災の教訓の継承につながる「語り・継ぎ」とともに、学校安全の充実に資する教員養成の充実とその基盤となる調査研究に取り組んで参ります。

応援いただいた成果を形に変えて、より多くの方と共有するために検討を重ねた結果、この度いただいた寄附金を本学大学院教育学研究科(教職大学院)第7期生有志が作成した「語り・継ぎ」トランプの印刷費にあてることにいたしました。

現在、本センターでは2024年3月に印刷した最新版を40セット貸出用としてご用意しています。

岩手県内の学校現場や教職員研修でも活用いただいている「語り・継ぎ」トランプには、東日本大震災の教訓を語り・継ぎ、今と未来の命を守るための工夫が詰まっています。学校等での復興教育や地域での学習会等に是非お役立てください(恐れ入りますが、送料はご負担いただきます)。

トランプの活用をご希望の際は、本センターの本山(motoyama@iwate-u.ac.jp)までご連絡ください。



「語り・継ぎ」トランプの概要はこちらから



上田小学校・仁王小学校学習支援ボランティア34名登録！

「地域の学校への学生派遣を通し、学校教育の実際、教職員の指導や経営、子どもの思い、保護者や地域の方々の思いを知り、教員へのあこがれをもつことができるようにする。」ことを目的に、上田小学校、仁王小学校での学習支援ボランティア活動を行っています。実際の学校現場で、体験を通して、肌でさまざまなことを実感してほしいと願っての取り組みです。今年度も募集したところ、34名の学生の皆さんに登録いただきました。学習支援ボランティア活動を実施し、成果としてあげられることを昨年度のアンケート等から一部紹介します。

〔学校現場の声から〕

- 取り組んだプリントの直接指導とプリントへの間接指導により、学習意欲の向上、基礎学力の定着につながった。教師の業務軽減にもつながった。

- 校外学習等の同行支援により、子どもたちの安全な学習が確保できた。また、個別に支援が必要な児童の支援により、楽しく参加することができた。

〔学生の声から〕

- 児童の様子や現状を知りたいという思いで参加した学習支援ボランティア活動でしたが、現状を知るだけではなく、一人一人に合わせた支援の方法や課題をかかえた児童への対応を含め、児童と教師のかかわり方まで考えるきっかけとなった。
- 「分かりやすく伝えるにはどうすればよいか」「一人一人の児童はどんなところでつまづいているのか」実際にやってみなければわからないことを学び、体感することができ、とても貴重な体験をした。

特別講演会のお知らせ

2024年6月1日(土)14時より、本学部北桐ホールにて特別講演会「命を守るために～ASUKAモデルへの想い～」を開催します。講師は桐田寿子さんです。桐田さんは学校における事故によって命が失われた明日香さんの母親として、救える命が救われる安全な学校の実現に向けて各種ご後援等、全国各地でご活躍されています。

「第3次学校安全の推進に関する計画」では、全ての教職志望者がAEDの使い方を含む一次救命処置について学ぶことが求められています。本学部では今年度より、学部内の応急手当普及員が普通救命講習Ⅰを定期的で開催する予定です。命を預かる職としての教職の責任を自覚するとともに、安全な学校づくりに向けて必要なことを一緒に考えてみませんか。参加ご希望の方は、下記QRコードよりお申込みください(締切は5月29日です)。



「教員研修会」に参加しませんか！

令和6年6月18日(土)に本学において教員研修会を開催します。岩手県教育委員会事務局首席経営指導主事兼小中学校人事課長兼服務管理監であられる佐藤孝之先生を講師にお招きし、ご講演をいただきます。佐藤先生は、中学校教師として岩手の多くの子ども達を、学校教育を通じて育成し、ご活躍されている先生です。本会では、「岩手の教育課題」や「これからの教員に求められる資質・能力」等についてお話をいただきます。教員を目指す学生にとって、そして、現職としてご活躍されている先生方にとって、たいへん参考になるお話をしてくださると思います。

参加の対象は、現職教員、学生、院生をはじめ、保護者や地域の方々も可能です。参加を希望される方は、下記QRコードからお申込みください。



私たちは「地域」をどう理解すればよいのか？

庄子 元

1. はじめに

2024年1月1日に発生した能登半島地震は、東北地方に住む私たちに東日本大震災の記憶を呼び起こし、改めて災害は身近であると痛感させた。能登半島地震ではマグニチュードの大きさに加え、山地が広がり、断崖が連続するという地形から食料や燃料の供給、外部からの救援活動に交通面での困難が生じた。インターネット上では交通条件が悪く、少子高齢化が進む集落の再編・撤退についての浅慮な書き込みがみられた¹⁾。また、今後の復興段階では、街や集落を再生するデザインについて、東日本大震災と同じく、どのように住民の意見を調整するのかという難しい舵取りを迫られるであろう。

これらの課題は、私たちが地域をどのように理解し、その上でいかに地域の存続や再編を考えるのかという点で共通する。「地域理解」は防災から復興までの各段階で重要であるものの、地域という語句の使いやすさもあり、その達成は難しい。本稿では「地域」をキーワードとする学問の一つである地理学の立場から、地域を理解するための視点を皆さんと共有したい。

2. 二つの地域概念

地理学では地域を理解する際、「等質地域」と「機能地域」という二つの概念を用いる²⁾。等質地域は共通する性格から分類された地域を指す。ある基準、例えば高齢化率などで塗り分けられた地図のうち、同じ色で塗られた地域が等質地域である。一方、機能地域は地域間の結びつきに焦点を当てた区分である。機能地域の代表例には通勤圏が挙げられ、通勤という居住地と就業地の結びつきからその範囲が決まる。

地理学、そのなかでも地域の成り立ちや構造を明らかにする「地誌学」の分野では、二つの概念のどちらかから地域を説明するのではなく、等質地域と機能地域を入れ子状に用いて地域を理解する。入れ子状の地域理解は地理学の基礎的なアプローチである。しかし、中学校や高校の「地理」では等質地域から地域が区分され、学習が始まる。そのため、一般的には等質地域の印象が強い。したがって、入れ子状に地域を理解するためには、理解しようとする地域が他の地域とどのように結びついているのかという機能地域の視点を意識的に持つ必要がある。

機能地域として把握される地域間の結びつきには、上述した通勤圏に加えて、婚姻関係の範囲を示す通婚圏（婚姻圏）も挙げられる。伝統的にこれらの機能地域は道路・鉄道といった物的なパス（経路）を踏まえて地域的特徴が捉えられてきた（藤岡（1956）や島田（1971）など）。ただし、地域間の結びつきは、必ずしも物的なパスによって可視化されるわけではない。東日本大震災の支援活動を実施したサードセクターを分析した菅野（2020）は、サードセクターがスケールフリーな社会ネットワークを持ち、社会ネットワークのハブとなる人物は政治・行政セクターからの支援の受けやすさから、被災地の主要都市に偏在していると指摘した。このように地域間の結びつきを把握することは、地域がどのよう

に成立しているのかだけでなく、災害発生時における支援活動の理解にもつながるのである。

3. 「地域」の意味

さて、ここまで「地域」の定義をあえて述べずに等質地域や機能地域といった地理学の概念を説明してきた。本稿の最後に「地域」そのものを考えてみたい。

私たちは「地域」という語句を日常的に目にする。例えば地域活性化や地域振興というフレーズは、都道府県や市町村、町内会だけでなく、大学でも頻繁に用いられる。その際、地域が表す範囲は市町村を上回る場合もあれば、集落や商店街といったミクロな範囲を指す場合もある。こうした「地域」の使われ方からわかるように、地域は特定のスケールを持たず、地域のスケールは文脈によって変化する。

ここでデジタル大辞泉を使って「地域」を調べると、そこには「区画された土地の区域。一定の範囲の土地。」と書かれている。私たちは地域という語句を「特定の範囲」という意味で用いるが、特定の範囲は自然発生的に生じるのではない。地域は私たちの「区切る」という行為の結果なのである。先に例示した地域活性化や地域振興でも、私たちは活性化したい範囲、振興すべき範囲を選び、全体から取り出す。そして、地域を選び取るという行為の裏側には、除外された範囲が存在する。そのため、地域のデザインには選ばれた者と除外された者のコンフリクト、地域を区切ろうとする主体間での意見の相違が含まれている。

皆さんが地域活性化や地域振興、災害からの復興で様々な設定される地域区分を考える際、一度立ち止まり、除かれた範囲にも思いを馳せてほしい。その範囲が除外されてよいのだろうか？ どういった主体、どのような意見調整によってその範囲は除外されたのだろうか？ 除外される範囲についても考え尽くすことが、「地域」を理解するうえでのマナーである。

注

- 1) 集落の撤退や再編についての議論そのものは重要である。地理学では1990年代から集落住民との対話を前提に、集落の福祉的な終焉を考える取り組み（むらおさめ）が実践されている。
- 2) これらに加えて「自然条件によって区分される地域」と「形式地域」もある。また、書籍によって機能地域は「結節地域」と表記されている場合もある。

文 献

- 島田周平（1971）農村地域の工業労働力―宮城県大崎地方の事例―、東北地理、23、157-163。
菅野 拓（2020）『つながりが生み出すイノベーション―サードセクターと創発する地域』ナカニシヤ出版。
藤岡謙二郎（1956）奈良盆地南部の交通路と谷口集落の変遷、人文地理、8、1-19、77。